

青森県むつ市川内町桧川と宿野部のテラ行事調査報告

古川 実¹⁾

The Report on Tera ritual at Hinokigawa and Shukunobe
(Kawauchi-machi, Mutsu city, Aomori prefecture)

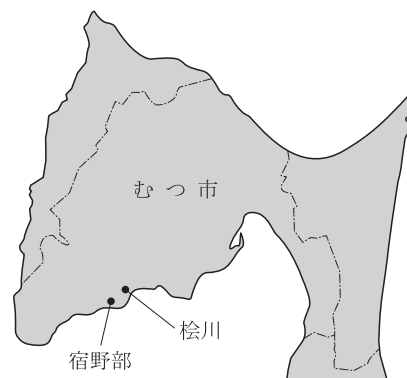
Minoru Kogawa

(キーワード：テラ ババ連中 フジ (風誦文))

はじめに

「テラ」、「テラこ」などと呼ばれ、ムラが設置している下北地方の宗教的な施設と、そこでババ連中たちが中心になって行う行事を平成25年度から本紀要に報告してきた²⁾。調査地は、佐井村牛滝、東通村大利・尻労・入口、むつ市大畑町小目名と、いずれも下北半島の津軽海峡側であった。本年度は、下北半島の陸奥湾に面する、むつ市川内町桧川と宿野部のテラ行事を中心とした調査を行った。

今までの調査では、ムラにテラがない東通村大利以外は、テラに集まり読経しているババ連中の方々から、伝承している念仏・御詠歌をその場で採録させていただき、聞き取り調査も行ったが、今回はできなかった。ババ連中が行う信仰に係わる習俗が現状は希薄である印象を持った。また、今までの調査地のババ連中は、テラ行事を行う組織として各家の主婦が必ず参加し、世代呼称としてのババ、ババドと必ずしも一致しなかったが、今回の調査地では、組織的な面も希薄であり、ババ、ババドは世代呼称として受け取るのが自然である。テラ施設の運営についても、今までの調査地とは異なる面があり、比較検討すべき事例と考える。



1 調査地の概況

むつ市川内町 (旧川内町) は、マサカリの形をした下北半島の西に突き出た部分の中央に位置し、南は陸奥湾に面し、北は恐山山地である。川内町の中では、田名部七湊として栄えた川内が町場を形成し、各宗派の檀那寺、官公署などが集まっている。桧川、宿野部は、川内から西方の陸奥湾岸沿いに位置し、川内に隣接して桧川、続いて宿野部となる。現在の戸数は桧川が約135戸、宿野部は約145戸。むつ市ホームページの統計資料 (平成29年1月6日作成データ)³⁾ では、人口は桧川395人、宿野部295人となっている。

桧川は、陸奥湾に南流する桧川河口部の海岸沿いに集落が広がっている。寛政 (1789-1801) ごろの記録「邦内郷村志」では、戸口29軒145人。明治初めの「新撰陸奥国誌」では、家数31軒、「山にヒあり海に鰈多し。或は水夫日雇して生を送る者あり」と記す⁴⁾。漁業従事者が多く、漁獲はナマコとホタテが主である。産土神社は桧川八幡宮である。

宿野部は、陸奥湾に南流する宿野部川の川沿いと海岸沿いに集落が広がっている。「邦内郷村志」では、戸口57軒、328人。「新撰陸奥国誌」では、家数66、宿野部川から「西を上と云ひ家数二十七東を下と云ふ家数三十九」、「農工商雑居し杣水夫を業とする者多し」とある⁵⁾。大正初年から宿野部川上流に大正鉱山 (銅山) ほかが開発・経営され賑わったが、長くは続かず大正期で閉山となった。零細な農業と出稼ぎで生計を立てていたようで、現在は住民の多くが勤めを終えた退職者だという。金七五三神社を産土神社とする。前述のとおり宿野部川を挟んで上 (西)、下 (東) に地域区分があり、ムラの規約、共有財産の管理なども分かれており、そのことがテラの管理・運営にも反映している。

2 桧川のテラ行事

(1) テラ

桧川の集落の中央部、国道338号沿道に桧川のテラである宝寿 (ほうじゅ) 庵がある。隣りが消防団屯所である。本堂の入口に歴代住職の墓と思われる石塔が並んでいるが、地域住民の墓地は近接していない。現在、川内の泉龍寺

1) 青森県立郷土館学芸課長 (〒030-0802 青森市本町二丁目8の14)

(曹洞宗)の末寺となっている。祭壇の中央に本尊の阿弥陀様、向かって右には石像の不動様を祀る。不動様だけは鈴を鳴らし拍手をして拝むものと教えられ、テラなのに不思議だと思っていると話者(80歳)はいう。平成元年にテラは新築しており、新旧のテラの写真が掛けられている。本堂の左隣の部屋が位牌堂となり、各家の位牌棚が並び、奥に釈迦像を祀る。本堂の右隣の部屋には、十三仏の掛け軸が下がり、その前に祭壇が設置してある。さらに右側に廊下を挟んで台所、居間などがある。

10数年前まで住職がいて、テラ行事や葬儀、法要を行った。平成10年ごろの調査に基づく『川内町史』によれば、大畑の大安寺(曹洞宗)の僧であった方が昭和47年ごろから住職となっていて、調査当時も居住している。松川の各家の年忌法要、卒塔婆書きなどを宗派に関係なく依頼されるため、他宗派の読経や儀礼を修行したという。ただし、葬式では檀那寺の僧が導師となり、その協導師となった。松川部落からは最低保障分の手当があったという⁶⁾。

住職がいなくなったとき、テラの世話をムラでは婦人会に頼んだ。その後、婦人会は広域の連合婦人会の活動などで面倒なことが多いことから解散してしまい、テラの世話は婦人会ではなく、ムラから頼まれた当時の婦人会メンバーがそのまま務めており、現在平均年齢80歳前後のパバド、14人が世話をしている状況である。ムラからは年3万円の補助があり、2週間に1回、掃除などを行っている。賽銭もこのパバドが管理し、テラの備品、除草剤の購入、燃料代などに充てている。

(2) テラの行事

現在、テラの行事はムラの行事として行われていて、ムラ婦人部がパバドの指示を受けて準備している。

1月16日、フジ(風誦文)読み(後述)。春の彼岸の中日、フジ読み。5月8日、花見節供。今は前後の都合の良い日に行っており、お釈迦様に甘茶をかける。住職がいたときは和尚の奥様が用意した。盆は16日と20日にテラ参り。16日にフジ読み。20日の夕方に灯籠流しをするが、海の様子をみて、風いでいる日に行く場合もある。秋の彼岸の中日、フジ読み。12月24日、昔は必ずお昼前後にテラに人が集まったが、今は漁が忙しく集まらなくなった。12月30日、年越し。膳を3つあげる。

正月16日、春秋の彼岸中日、盆の16日のフジ読みは、川内から和尚が来てお経を唱え、先祖供養を依頼した各家の世帯主の名前を読み上げる。正月は泉龍寺(曹洞宗)、次が多善寺(浄土宗)と交代で和尚を呼んでいる。

灯籠流しは、テラに住職がいたときは、奥様が灯籠を組み立てたが、いなくなってからはパバドが組み立てており、ムラから1万7千円をもらっている。

彼岸では、各家で彼岸餅を作って位牌の棚などにあげる。糯米の粉をはたいて中にあんこを入れて蒸したもので、丸くした真ん中に食紅で丸を付ける。めでたいときは大きな丸だが、彼岸は小さい丸を付けるものだという。

松川八幡の御祭礼では、以前は神楽がテラにも参っていて、このときも祭壇に団子をあげた。

(3) パバド(パバ連中)

消防屯所の裏、宝寿庵の手前にパバドがパバドの部屋と呼んでいる平屋があり、天気が悪く作業に出られないときや、暇ができると、ここにパバドが集まってくる。ゲートボールが流行った10年ぐらい前には、ムラに老人ホームのような憩いの場があり、そこに集まっていたが、古くなったので現在のパバドの部屋を建てた。年寄りのお婆さんたちが集まることは、代々続いており、各自が昼食を持ち寄って、ここで食べるなどする。おかげでおしゃべりなどができるし、みんな惚けていないという。

以前は毎月24日が仏様の日で、団子を作りテラに参って仏様にあげた。女の人の休み日でもあった。今は24日に集まることはない。また、今はないが十夜といってテラに泊まったり、月を見るといって泊まっていたという。

御詠歌・お経の伝承はないが、かつては数珠回しを行った。50年ほど前は、ムラに風邪などの流行病が流行ったとき、パバドが1人は数珠を肩にかけ、皆で行列になってムラを回り、ムラの端端では一斉に唱えごとをして、数珠を広げて綱のようにして振り、それを外に押し出すようにした。ヤメボイといって、病気を追い払い、入ってこないように祈願した。盆の灯籠流しでも数珠を回したが、今は鉦を叩くだけである。現在も大数珠を回すのは、死人があったときで、死んで7日間、喪家の仏壇の前で鉦、木魚を叩きながら、亡くなった人の親戚と集まった人で百万遍を唱え、数珠を回す。豆やササゲを50個用意し、それを置いて回数を数える。1人が50回唱え、集まった人が合唱して100回となり、百万遍唱えたということになる。唱える文句は「ナムサンゼショウブ」で、唱えた後に鉦を叩くという順を繰り返す。大数珠はテラに置いてあり、パバドが管理している。

(4) フジ(風誦文)読み

前述の(3)テラの行事のフジ読みについて、平成28年9月22日彼岸の中日に行われた様子を報告する。パバドによれば、松川のフジ読みは昔ながらの行事で、集まる人数が周辺のムラの中では一番多いのだという。

11時ごろから宝寿庵に人が集まり始める。パバドはすでにテラの居間に集まっていて、祭壇のロウソクに火を付けるなどの準備に入る。本堂の中央には8畳の広さのビニール莫座が敷かれ、正面の祭壇側を除く三方に、座布団や椅子が並べられる。集まる人数はいつも100人くらいであるという。

13時から始まるので、12時45分ごろには、本堂にはすでに人が集まり座っている。男性は3人くらいで、ほとんどが家の主婦である。フジにはホトケのある家から宗派に関係なく出るようになっており、姑が出られなくなると嫁が出ることになるのだという。

川内の泉龍寺から住職が来て、ババドの案内で控え室で着替え、読経が始まる。般若心経の読経であったが、招かれた和尚が曹洞宗で、曹洞宗の場合は般若心経となる。読経の終わりごろに、いくつかの焼香箱が参列者に回され、各々焼香を行い、次の人に回していく。その後にフジとって、テラにホトケを祀っている各家の世帯主の名を「○○家ショウレイ…」と住職が読み上げる。参列者は自分の家や親戚の家などが読み上げられると、賽銭を手に握り中央の墓座に向かって投げる。賽銭は信玄袋やビニール袋に入れて、各自が持ってくる。日ごろ貯めて置いた1円、10円硬貨が多く、彼岸は御縁とは関係ないので5円は使わない。袋一杯でだいたい500円分くらいだという。

フジの読み上げは15分くらいかかり、13時30分ごろに終了。撒かれた賽銭はババドが集める。集まった人は各々位牌堂に寄り、あがっている供物を集め家に持って帰る。

泉龍寺住職の鈴木氏のお話では、フジは風誦文のことで仏供養のための読経であり、供養を依頼する家の現世帯主の名簿を、各ムラの部落事務所書記があらかじめ用意しているという。

川内町では各宗派の本寺が川内にあり、各ムラには宗派に関係なくお参りするテラがあって、ババ連中がその管理をしていることが多いという。本寺の和尚は檀家の葬式・法要のほか、各地区のテラの行事に招かれて読経などをしている。地区のテラにはもともと住職がいて、本寺から行くのは大変なので、彼岸・盆はムラのテラの僧が務めていたが、居なくなったのでムラの地区役員の依頼で行くようになった。泉龍寺は、松川、宿野部、蛸崎から呼ばれて務めており、川内の浄土宗多善寺の住職と行事ごとに交代で出向いている。

賽銭を撒くのは、松川、宿野部で行っており、むつ市円通寺でも前には撒いていたという。フジの賽銭は、死者のお小遣いとして撒くものといわれているという。

3 宿野部のテラの行事

(1) テラ

宿野部では、川内に所在する曹洞宗泉龍寺と浄土宗多善寺の檀家が多い。泉龍寺の檀家になっている家は、古い家など格が高い家が多く、そのような家は西地区に多いともいう。家の宗派に関係なく、ムラで設置し管理しているテラとして、宿野部橋から150メートルほど上流の東側の川岸に久地（くじ）庵がある。テラの後ろは広い共同墓地となっている。このテラは、宿野部にあった地蔵庵と久保（くぼ）庵という2つのテラを統合し、平成10年に新築したテラである。

調査地の概況で述べたとおり、宿野部は宿野部川を境にして西地区と東地区に分かれており、西地区に地蔵庵、東地区に久保庵があった。庵の歴代住職の記録や地蔵庵関連の史料からは、両庵とも江戸期には設置されていたことが確認できる⁷⁾。地蔵庵は多善寺末寺、久保庵は泉龍寺末寺として位置づけられていたが、庵の住職は宗派にこだわらずムラで頼んでいたことが、現在の聞き取りからも窺われる。かつては宿野部から青森市まで便船があり、青森から紹介を受けて庵の住職を依頼したこともあったという。泉龍寺住職鈴木氏のお話では、地区のテラの住職はムラで探し、人選にあたって宗派は関係なかった。久保庵が曹洞宗末寺であるのは、庵住職がたまたま曹洞宗の僧であったからだという。地蔵庵は平成元年に住職が逝去してから、また、久保庵は昭和57年に住職が退職してから無住のままとなり、テラ統合後も無住の状態は続いている。

現在、テラの管理責任者は宿野部の役職として投票により選出しており、テラの担当理事（寺総代）として2名が務めている。テラ統合前は各テラごとに総会があり、寺総代と理事を選出して管理した。宿野部でホトケがある家は140軒くらいあり、テラの行事や世話は、家並みで10軒くらいに班分けした当番が行い、行事ごとの回り番としている。最近は空き家が多くなり、2班1組で当番とする場合もあるという。実際に出ているのは女性が多い。引き継ぎは口頭で行っている。

(2) テラの行事

テラの行事は、現在、ムラの行事として行われており、1月に「久地庵年間行事予定表」が各家に配布される。以下は平成28年の行事予定表（2月訂正版）に記された行事に、聞き取りの内容を加えたものである。月日は新暦である。

2月15日 涅槃会 釈迦命日 当番はお供え物を作り涅槃図を下げ、柳を飾る。正面に机を置く。掃除、後片付。

女の役員がウラカグズ（家の裏）から柳（ネコヤナギ）を1尺くらいの長さで切ってきて水に入れておき、芽が出たもの2、3本を祭壇に立てて飾る。

3月 春分の日 春彼岸法要 住職が来てお経をあげる。当番は団子を作る。掃除・片付け。

4月24日 地蔵講 お地蔵様の縁日

5月8日 釈迦降誕会 お釈迦の誕生日 当番は花のお餅を作り、釈迦誕生仏を甘茶のお湯の桶に入れてかけ、正面の机に安置する。甘茶をかけてお参りする。掃除・片付け。花見の日ともいう。花のお餅は、中にあんこを入れた餅を型で押し、梅や桜の形にしたもので、真ん中にピンクや黄、緑の色を付けたもの。菊、鯛、稲穂などの型もあり、各家で作って持っている。型はハウノキをよく使った。花のお餅をお重に詰めて各家でお供えした。

6月5日 節供

7月24日 地藏講 お地藏様の縁日

8月13日 盂蘭盆会 住職が来てお経をあげる。当番は掃除・後片付け。

8月20日 灯籠流し 住職が来てお経をあげる。灯籠は川内の寺に注文し購入している。

9月秋分の日 秋彼岸法要 住職が来てお経。当番は団子を作る。掃除・片付け。

10月24日 地藏講 お地藏様の縁日

11月15日 十夜法要 十夜会 バサマドが集まって食べ物を食べるなどする。

12月中旬 すず払い 当番はみがきをし掃除。平成28年は12月11日の日曜日、午前8時ごろから行い、午前中に終了。墓地の地藏もきれいにする。

以前は12月24日がババドの集まりの日だったが、今は行われていない。年越しは各家で位牌堂に供物をあげる。

川内の和尚がテラに来るときは、男女問わず位牌堂にお菓子などのお供えを持って行くが、テラの行事に集まる人は少なくなっているという。なお、「年間行事予定表」には「当番のない行事日もお寺は開放します。各自位牌堂にお供えされる方は午前7時～午後4時までの時間をお守り下さい。当番は当番帳に記載して次の当番に引き継いで下さい」と記されている。

(3) テラの統合

ここでは地藏庵、久保庵の統合の経緯などについて、両庵の統合を記念して宿野部が刊行した『庵史』⁸⁾を参考にしながら述べることにする。

統合の動きは、宿野部の東西の墓地を一つにまとめることから始まったようである。数年にわたる検討の結果、平成6年に宿野部全体の事業として宿野部墓地公園が完成し、墓地管理が東西の地区管理（各庵の管理）から宿野部の統合管理になった。この事業実績を受け、建物が老朽化していた両庵を統合し新築する計画が具体化していったようである。川内の本寺に特別相談することはなかった。

当然、意見の違いがあったらしく、最も多かったのはおばあさん方からの意見で、テラに行くための足が問題であったという。各庵で行われた行事の整理も必要で、部落総会のときに年配のお母さん方で話し合い、東西で一緒にできる行事に統一した。『庵史』編集後記では「両庵寺を廃寺とする苦渋の選択」により新築されたことが述べられており、当時の状況が察せられる。

新築の財源は、東・西地区に共有の山林があり、その立木を売って賄った。当時は景気が一番良く、個人負担がなく部落経費で実現できたことは、誇らしいことという。祭壇の建具、用具などは、両庵の物が良い物で廃棄するのは惜しいという建築業者からの進言もあり、当初設計を変更して引き続き活用した。新築のテラの名称は公募によったもので、3件寄せられた「久地庵」の名称とすることに決定した。

宿野部の場合は、結局はテラを統合することにまとまり、平成10年に久地庵が落成した。同様にテラが2つある蛸崎では、テラの新築の話があったものの、一方は宗派に関係なく集まるテラであり、他方は同宗派の者だけが集まるテラであるため、行事内容が別で統合はしなかったという。

4 課題

桜川の宝寿庵、宿野部の地藏庵、久保庵については、先行の民俗調査報告がある。昭和50年代の調査と思われる宮本袈裟雄の久保庵の報告⁹⁾、平成10年前後の調査である川内町史編さんによる桜川・宿野部両地区の報告¹⁰⁾、同時期の青森県史編さん室民俗部会による宿野部の報告¹¹⁾である。ババ連中の活動内容やテラの変遷をたどり、現状を検討する手がかりとなる貴重な事例であるが、本報告では十分な活用ができなかった。住職が居たテラから無住のテラに常態化する節目を、聞き取り調査も含めて把握することが可能だと思われるので、引き続き調査する必要がある。

宿野部の両庵の統合については、東西地区ごとの自治活動の動向とともに理解していく必要がある。西地区の自治的規約「宿野部西人民地藏庵信徒会則」（昭和14年旧正月15日施行）では、この会は宿野部橋より西方に居住し、地藏庵信徒として加入する者により組織し、相互の信仰開発、貯金、現金、水車、地藏庵、造林地の管理並びに福利増進を目的とし、事務所を地藏庵内に置くとしている。一方、東地区にも同様の規約「宿野部水路組規約」（昭和44年1月13日より有効）があり、宿野部川東部落内に居住する者で組織し、団体の向上をはかり社会的にも民生の安全を図ることを目的とし、造林事業、農道・水路の補強・改修、福利向上施設に関すること、久保庵の補修などを行い、事業所を久保庵に置くとしている¹²⁾。両地区ともテラを自治的組織のもとに管理することを明文化し、事

務所をテラに置いており、テラの統合は宿野部の自治的組織の統合と不可分のことと推察される。

また、この事例は、テラの機能を見直すべき事例なのかも知れない。宿野部に居住する場合、水道利用のために会（組合）に加入する必要がある、そうすると規約により庵の管理・利用にも関わることとなる。テラを宗教的な施設として位置付けるほかに、ムラ運営上の機能にも注意する必要があるだろう。

《注》

- 2) 古川実「青森県佐井村福浦のテラ行事調査報告」（『青森県立郷土館研究紀要 第38号』 2014）「青森県東通村大利・尻労のテラ行事と念仏行事調査報告」（『青森県立郷土館研究紀要 第39号』 2015）「青森県東通村入口・むつ市大畑町小目名のテラ行事調査報告」（『青森県立郷土館研究紀要 第40号』 2016）
- 3) むつ市ホームページ <http://www.city.mutsu.lg.jp/index.cfm/13,5623,13,287,html>
- 4) 『角川日本地名大辞典 2 青森県』及び『新撰陸奥国誌第4巻 みちのく双書第18集』を参考にした。
- 5) 前掲4)に同じ。
- 6) 大湯卓二「(三) 松川の宝寿庵」（『川内町史 民俗編・自然Ⅰ編』第4章第2節「寺院と庵」 1999）
- 7) 久地庵建設渉外部会記念誌編集委員会『庵史』（1998） 両庵の歴代住職の来歴や地藏庵の文久二（1862）年「当庵什宝目録帖」解説文などが掲載されている。
- 8) 前掲7)
- 9) 宮本袈裟雄「下北半島の里修験」（『里修験の研究』復刻版 岩田書院 2010（元版 吉川弘文館 1984））
- 10) 大湯卓二「寺院と庵」（『川内町史 民俗編・自然Ⅰ編』1999）
- 11) 大湯卓二「講」、小池淳一「テラの変遷」（青森県史編さん室『青森県史叢書 下北半島西通りの民俗』第4章「信仰」 2003）
- 12) 前掲7) 東西両地区の規約が掲載されている。現在の組織規約については、未調査。

（参考文献）

- 青森県史編さん室『青森県史 民俗編 資料下北』 2007
同 『青森県史叢書 下北半島西通りの民俗』 2003
青森県文化財保護協会『新撰陸奥国誌』第4巻 みちのく双書第18集 1965
角川日本地名大辞典編纂委員会『角川日本地名大辞典 2 青森県』 1991
川内町史編さん委員会『川内町史』1999
久地庵建設渉外部会記念誌編集委員会『庵史』1998
九学会連合連合下北調査委員会『下北 自然・文化・社会』 1967
笹澤善八『川内町誌』1936（笹澤魯羊『下北半島町村誌』上下巻 復刻 名著出版 1980）



松川 宝寿庵



宝寿庵 本堂



宝寿庵 秋彼岸 フジ



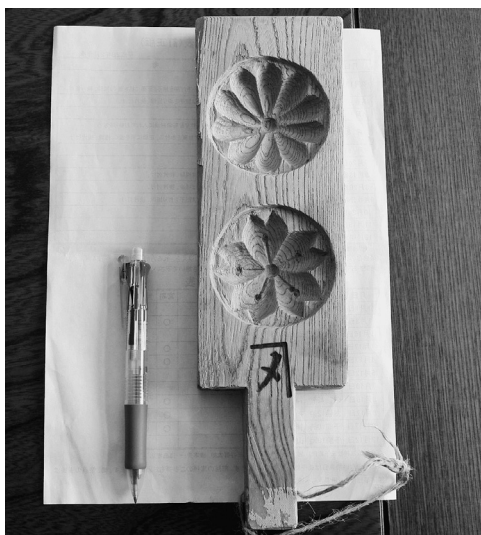
宝寿庵 秋彼岸 フジ 賽銭を撒く



宿野部 久地庵



久地庵 本堂



5月8日の花の餅の型



彼岸餅